**大阪なおみは日本人？**

勝てば官軍？ 大坂なおみ選手に対する日本の受け止め方、米メディアの見方

Rena Schild / Shutterstock.com

　大坂なおみ選手の全米オープン優勝をきっかけに、日本では彼女のアイデンティティを巡る論争が勃発した。在住国のアメリカ、そして父親の出身地であるハイチにおいてはどのように語られているのだろうか。

◆「アメリカをホームと呼んでいる」

　ワシントン・ポスト紙は、準決勝の前に出した記事において、大坂選手が日本のテニス協会を選んだことを「財政的理由」とし、こう言及している。「この財政的な決断は、彼女の多文化的アイデンティティとは別物である。彼女は3つのカルチャーを持ち、日本とアメリカの2つの国籍を持ち、アメリカをホームと呼んでいる」。また2ヶ国語で行われる記者会見において、「彼女は日本語を聞き取り、理解をするが、英語で回答する。英語では、より豊かで微妙な表現ができる」と伝える。

　そして、3ヶ国についての彼女の発言を掲載している。「日本の文化？　私はそのすべてを愛しています。アメリカは、私が住んでいるところ。フロリダでトレーニングしています。そしてハイチですが、もしあなたが今までハイチ人に会ったことがあれば、彼らが本当にポジティブであることを知っていると思います。あなた方が友人なら、彼らはあなたのために何でもするでしょう。それは本当によい性質ですし、私の祖父母や父方の家族がそうであることを本当にうれしく思います」

◆「日本人の定義が曖昧になってきている」

　ニューヨーク・タイムズ紙は、東京とアメリカで育ったモトコ・リッチ東京支局長の記事を掲載。インタビューに答えた日本人のある親子は、「彼女の顔は日本人にみえる」、謙虚で喜びを爆発させない「彼女の魂は日本人だ」と話す。このように日本人を広い意味でとらえる世代が現れてきているものの、日本の保守的な性質が、純血主義に固執していると伝えている。

　14年間日本で暮らした経験を持つ、同紙のアフリカ系アメリカ人のコラムニスト、ベイイ・マクニール氏は、「この国は同質でいることに誇りを持っている。しかし、彼女にスポットライトをあてることで、自分たちが同質ではないと知っていると世界にメッセージを送っていることになる」と指摘する。

　実際、昔ながらの日本人の概念が変わりつつあるという兆候が見られたとリッチ氏は綴る。「日本人の定義が曖昧になってきていると思う。日本の社会はもっと寛容になりつつある」という意見も紹介された。

▶︎次のページ　「勝てば日本人、負ければハーフ」という感覚

「日本は大坂なおみのような『外国人の血』を必要としている」

　アメリカのネットメディア『デイリービースト』は、日本在住のライター、ジェイク・アデルシュタイン氏の「日本は大坂なおみのような『外国人の血』を必要としている」という見出しの記事を掲載した。アデルシュタイン氏は、特に混血児において、「勝てば官軍、負ければ賊軍」がいまだ現代日本のスポーツ界でまかり通っていると指摘する。つまり、「勝てば日本人、負ければハーフ」であると。大坂選手が全米オープンで優勝した途端、多くの日本人が彼女が完全に日本人だと認めたと伝える。同じような例として、ダルビッシュ有選手を挙げている。

　また、日本の外国人嫌悪は深刻なものであり、日本がただの日和見主義者から勝利国になることを望むなら、これを克服しないといけないとしている。彼女の勝利は、何が日本人なのか、そして日本が生き残り、国家として成長するために必要な、多人種社会を作り出す準備が整っているかを問いかけていると語っている。

◆「私たちは彼女に投資しなかった」

　一方、ハイチのネットメディア『Woy Magazine』は、大坂選手の優勝後、「多くの同胞人が、この勝利を自分たちのものとして喜んでいいのか問い始めた」と伝える。特に、モイーズ大統領が、テニススターを「私たちのなおみ」と呼んで祝福したときに、「彼女は私たちのものではない。私たちは彼女に投資しなかった。それなのに、ハイチ人は気楽に、臆面もなく、私たちのものでもない勝利を自慢していた」といった声が上がったという。

　そういった声に対し同記事は、「私たちは、ハイチ人であることが何を意味するのか再検討する必要がある」「ハイチが子供たちに価値のある国」にしていくべきとしている。